Japanese Journal of Applied Psychology
1999, No. 25, 29-51

シンポジウム

子どもの発達環境における諸問題

企画・司会　平野　馨（常磐大学短期大学部幼児教育科教授）

シンポジスト　柴田敏隆（フリーランス・コンサーベイショニスト，（財）日本自然保護協会理事，神奈川県自然環境保全審議会委員）

近藤聡子（詩人，児童文学作家，遊葉館カウンセリング・ケースワーク主宰，東京女子医大第二病院非常勤講師，スクールカウンセラー）

中村桂子（JT生命誌研究館副館長，大阪大学連携大学院教授）

高橋鷹志（新潟大学自然科学研究科教授，東京大学名誉教授）

指定討論者　高橋たまき（日本女子大学人間社会学部教授，現在 帝京平成大学）

平野：それでは定刻になりましたので開会させていただきます。はじめに日本応用心理学会会長稲毛教子先生からご挨拶頂きます。よろしくお願いいたします。

日本応用心理学会会長　稲毛教子（東京国際大学）：皆様こんにちは。大変お寒いところ，ようこそお出で下さいました。私ども日本応用心理学会では，年に一回のこの公開シンポジウムをいたしております。今回のテーマは，たいへん今日的な話題の魅力あるテーマだと私どもは思っております。大変著名なシンポジストの先生方にお願いしてございますので，どうぞ皆様方最後までよろしくお願いいたします。それでは，企画・司会の平野先生よろしくお願いいたします。

平野：本日は『子供の発達環境』に関してそれぞれ造詣の深い先生方にお集まりいただきまして，お話を伺うことができまして大変幸いに存じております。

発達環境と申しましても，よく一般的には，「物理的環境」，「心理的な環境」，――“物理的環境”というのは自然とか町とか建物とか，それから，“心理的な環境”と申しますと，人間関係あるいは一人ひとりが自分をとりまく環境をどのように受け取っているか，そのことから個性が創造されていくというふうに考えることができると思います。

最近の子供の姿を指摘する言葉のなかに，「心身の発達のアンバランス」――「理性と感性の不調和」といったことが言われますし，また“自律”――自らをコントロールする，そういう力の欠如，――さらには，“むかつく”，とか，“きれる”，とかいうことが言われております。このような「自律性の欠如」，それから，「目標や生きがい・生きる事の意味の喪失」，「極度な閉塞感」など，挙げてまいりますと切りがないほど沢山いわれております。

今日の登壇の先生方は，各方面でそれぞれ具体的な活動に従事されてこられた方々をお招きいたしました。これから今申しましたような問題に的確な示唆を頂けるんじゃないかと期待しております。お手元に配布いたしました資料がございますので，先生方の御紹介の細かいことまでは申しませんが，早速，本題に入らせていただくようにお願いいたします。発言の順番は向かって右側から，柴田先生，近藤先生，中村先生，高橋鷹志先生，その四かたで，もう一人指定討論者として高橋たまき先生，本学会の常任委員で，子供の遊びの研究者――遊びに関しまして放送大学でも講座を担当されてます。高橋たまき先生――あのフロアの方がまず始めに聴きやすいということなので，席がこちらにございますけれどもそちらにいらしゃいます。

それでは，順番によりまして，まず，柴田先生，

はじめにお話頂きまして，そしてあとでそれに付随する面白いスライドを拝見できるんじゃないかと思います。柴田先生は山階鳥類研究所にいらしたことがあり，自然保護のことに非常に関心・造詣が深くて，『育てる会』という子供を野外活動に導いたり，あるいは，「山村留学」これを真っ先に始めました会がございますが，そこの会誌なんかに投稿なさっている先生でございます。柴田先生，よろしくお願いいたします。

柴田：ご紹介頂きました柴田と申します。高い所からお話し申し上げるご無礼をお許し頂きたいと思います。最初に，大変光栄あるこういう席にお招き頂きまして，発言の機会をお与え下さいました日本応用心理学会の稲毛教子会長先生，それから，いろいろ私へのコンタクトの労をお取りになった平野馨先生に篤く御礼を申し上げます。

私は子供の「自然接触の教育的意義」という題で，まず，私の今までの経験に基づくお話を申し上げたいと思います。今，平野先生のご挨拶にありましたけど，最近の子供たちに，いろいろおかしな様相が沢山でてきました。私のような自然の中を駆けずり回っている人間の目から見ると，そういう問題の背景に必ずつきまとうものが「自然疎外」。子供が自然に触れていない。メガロポリスに代表されるような近代の文明というのは，どうも物理と化学にひどく片寄り，これはアメリカの大学の先生で，バリー・コモナーという方が「いまの文明は二本脚の椅子だ」といっています。椅子っていうのは三本脚がいちばん安定性が高いんですけど，今四本脚が非常に多いです。四本脚の椅子というのはたいていカタカタカタカタしますね，三本というのはすごく安定性高いですが，三本脚の椅子が必要なのに，今の文明は二本脚の椅子だ，その二本の脚というのは物理と化学です。「環境生物学」という大事な脚がない，だからひっくり返るの当たり前だ，と言っているんですね。どうもこの自由科学産業・機械科学技術で代表されるようなそのひとつの相としてメガロポリスが挙げられますけど，そういう所で育つ子供たちというのは生まれてこの方，甚だしい自然疎外の中で生活を余儀なくされている。そのためと言うとおかしいですけどいろいろ問題が出てきちゃう。私は 2 つの作業仮説みたいなものを考えてそれで子供に対応しております。

私の専門は実は，鳥の研究所にいたものですから，動物学のほうが専門なのですが，「子供と遊ぶ専門」って言ってもいいか，今年で 44 年になります。毎月一回は必ず子供たちと野山を駆けづりまわっている。それでだいたい精神年齢が 12 歳ぐらいですから，木に登ったり，ズボンはいたまま川のなかジャブジャブ歩いたりする。子供が目まるくして「おじさん，幾つだ？」って言うから「おじさん 29 だ」って。「うそーっ!!」実は 1929 年生まれなんですね，ですから，29 なんだよって言うと低学年の子は「ふ〜ん」と納得っていうようなことで，（笑）高学年の子は指折り数えて「あっ，おじさん 60 超えている」。60 超えているじゃないんです，もう今年 70 になるんです。（笑）表向きは 29 歳，精神年齢は 12 歳，本当の暦年齢は個人情報ですから厳重に秘匿だと。「だっておじさん頭白いじゃん」って言うので「これは蜂に刺されないために白くしているのだよ。もし機会がありましたら後で雀蜂と仲良くしているスライドを御覧に入れようと思いますが。（笑）

私は，自然というのは複雑で多様性に富んでいて情報量が多い，今で言うとファジーであり複雑系の権化だと考えます。そういう中で子供が，子供でなくてもそうですけど，そういう自然に対応するためにはいろんな能力を要求されます。その能力を発揮するためには，高い能動性が必要です。アクティビティというんですけどね。子供の場合その能動性を支えるのは，バイタリティです。子供って小さいんですけど，長い人生やっていくために秘められたバイタリティというのは不思議なものです。ものすごい活力があるんですね。それで今ご婦人ですと 83 歳ぐらいですか，男性が 76 歳か 77 歳くらい，世界で一番長い平均余命を生きていくためのバイタリティが隠されている。それが，非常に複雑で多様性に富んだ自然の中では存分に発揮される。だから自然の中で遊ぶ子供っていうのは目がキラキラ輝きます。これは目が光るんじゃなくて，涙腺の活動が盛んになっているんですね。角膜の表面を覆う涙の層が厚くなるんです。そうするとどうしても反射の効率が高まりますから，目が光るんですね。耳が真っ赤になります。この末端の毛細血管が全部拡張してですね，中で轟々と音をたてて，といって音立てているかどうかは分かりませんけれど，顕微鏡で見る

とね，まるで八幡宮のお賽銭みたいに赤血球がザラザラザラザラ真っ赤になって流れている，口が化け猫みたいに耳まで裂けてですね，ものすごい大きな声を出して背中に泥がつくような遊びをする。今背中を床につけるような遊びというのはレスリングだとか，回転レシーブだとかですね，柔道だとかです。そんな程度しかもう泥はつきません。みんなプレイグランドでやりますからね。そういう泥がつくような遊びの中で子供は育つと人生やっていくのに非常に多様性に富んだ能力が身についてくる。例えば創造性だとか，瞬発力，適応性，選択性，柔軟性，巧緻性，敏捷性，想像性（イマジネーション），平衡だとか調整というのは，バランスの感覚，判断力，さっき申し上げました瞬発力，持久力，自律性，非常に繊細な感性など，こういったものが実に豊かに育ちます。それから，旺盛な成長欲求，自発性だとか自立性が育ちます。

セルフ・エスティーム（自尊自敬），最近よく言われるようになりました。自分を大事にできない子供は他人も大事にできません。子供ならず大人もそうです。そのセルフ・エスティームが非常に細やかに身についてきます。それから権威に対する健康な挑戦と，それに同化しようとするための「自律克己」。子どもに，「尊敬する人は」って言うと「お父さん」っていう子が多いんですね。大変親孝行でいいんですけど，そのお父さん会社では窓際でしょぼくれているなんてあんまりイマジネーションよくありませんね。（笑い）昔は尊敬する人っていうと例えばエジソンだとか，ナポレオンとか，宮沢賢治だとかってそういう尊敬する人物がいて，その尊敬する人物に肖ろうと思って，例えば宮沢賢治が夜中に起きて小岩井農場まで歩きながら，手帳に心象スケッチを書き綴った。自分もそうしようっていうことで，夜中にその辺歩きまわったりするんですね。そのための自律克己，これが権威に対する健康な挑戦。そういうのなくなちゃいましたですねぇ。それからゆとりだとか，潤いだとか，あたたかみなどのような人間性，情緒性ですね。発明だとか発見だとか，それからレクリエート（甦り）って言いますか，それから集団で遊ぶときには遊び集団があってガキ大将・おてんば娘を頭に頂いて，だいたい年齢序列があってね，ガキ大将・おてんば娘というと 13・14 歳くらいでしょうかね，今で言うと中学校の 2 年生くらいまで。3 年生くらいになりますと大人の世界に入り込みますのであのような馬鹿馬鹿しいことだんだん止めてくるのですが。それでずーっと下のほうに小学校の低学年の子，あるいは，幼稚園の年長の子がいて，おみそという，邪魔なんだけど将来は自分たちの遊び集団の中核に育っていく。非常によく面倒をみます。その面倒見だとか，いたわりだとか，世話焼きだとか，慈しみだとかって，この情緒性というのは極めて豊かですね。今，同年齢・同能力の子供たちが集団でひとつの玉をめぐって敵と勝負を争う雑駁な遊びに溺れ込んでいる。ルールが決まってて，コートが決まってて，用具が決まっててですねぇ，ユニホームまで決まってて，監督やコーチの理不尽なしごきに耐えながら，ただただ敵と戦って勝つことしか考えない。

私はもうとても雑駁な遊びだと思うんですが，昔のその（異年齢・異能力の）遊び集団というのは，自然の中で自然を素材にして非常にアクティブな，積極的な遊び方をしました。例えば，竹の棒を振り回しても「この竹は正宗の名刀だぞぉ」と言うとですね。本人もそう思っちゃうし，相手の方もその竹の棒はきらりと光る，抜けば玉散る氷の刃っていうふうに，イマジネーションが育つんですね。今はそういうのない。テレビで全部映像を押し付けられますから，例えば宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』という物語は実にこの豊麗なイマジネーションを各自頭の中に描くのですけど，あれ映像にすると全然だめなんですね。だから人間をつかって映画にして上手くいかないっていうので猫つかってやったりしますけど，結局絵を描いた人のイマジネーションを押し付けられるだけ。そういう雑駁な中に育つ，集団で力をあわせるための協調性だとか親和性とか追従性，これが「フォロアーシップ」ですねぇ。これひっくり返しますとリーダーシップ＝指導性，自己制御＝集団のための犠牲奉仕・正義感・罪の意識，そういったものが豊かに備わってきます。

ふとした時間のゆとりの中で深い思索，何で私生まれただろう，人生って何なんだろう，どうしたらいいんだろうのような思索が育ってきます。朝から晩までひたすらスリコ木で玉たたいて，四角いところ時計の針とは反対に駆けずり回って，たった 18 人でしか遊べない不自由な遊びなんて言ったら叱られちゃいますけど，甲子園に行って勝っても負けて

も泣きながらあの砂を持って帰る高校野球の選手たちがですね，あれってプッツンなんです。帰ってもう，もうたぶん二度と甲子園行けない。(それ専門的な学校は何回か出るんですけど)，そうするとですね，人生の目標なくなちゃうんですねぇ。恐ろしいと思わないのか，そういう背景に必ず自然疎外がつきまとっている，と。これ私のひとつの作業仮説です。

自然は複雑で多様性に富んでいて情報量が多くてファジーであって，複雑系の権化である，と。それに対応するための高い能動性，それを支えるバイタリティ，もうひとつはですがね，人類の歴史の中の99％は狩猟の文化であったということ。狩猟の文化というのは，だいたい自然の中で自然の摂理に則してですねぇ。要するに狼だとかトラなどと同じような生態的な地位で，獲物を捕って食べているというような生活。やがて人類は農耕の文明というのを起こします。森からでて，森を切り払って草原をこしらえて，そこで食べ物つくります。その食べ物は穀物だとか芋だとか，ちょっと変わったのでとうもろこしがあります。いずれも‘草’ですね。だから農場というのは人間の目から見れば作物を栽培しているんですけども，野生の生き物から見れば一種の草原＝人工草原。このほうが食物の獲得効率が高いのです。だけど，生態的にいうと自然の生産性というのは森のほうが絶対に多い。絶対に多いけど食物の獲得の効率が低いから人間は農耕の文明を発達させた。そうすると，自然の生態系のシステムのエネルギーのフローと，全然別な人間独自のエネルギーのフローをこしらえる。その延長線上に現在の近代文明が位置付けられる。ですけどこの農耕文明の発祥がわずか0.3％です。人類の起源を何年と押さえるかというのはなかなか難しいところですけど，仮に200万年とします。原人で200万年としますと，その99.7％というのは単純計算で199万4千年です。あとの6千年くらいに，農耕の文明からこの近代文明に移る新しいエネルギーのフローができているんですね。この199万4千年の時間の長さと，私たちの平均余命80年くらいの時間の長さというのを比べたら，比べるべくもない。ものすごい長い長い‘経験歴’がある。その経験歴のいくつかは，私たちの遺伝子の中に記憶されていると思います。だから私たちが例えば，お刺身を食べる時に色を見て，臭いを嗅いで，指で触ってですね，このお刺身は良いか悪いか判断します。少しおかしいがそれでも，せっかくディスカウントで買ってきたんだから食べちまえって，口の中に入れる時に変な味がするとですね，パーッと，「こりゃいかん，腐っている」。そんなせっかく買ってきたんだから飲んじまえよ，って飲んじまうと胃袋がですねぇ，「変なものが入ってきたよ」と脳のほうに照会するんですね。と，脳が「それはいけません，出しなさい」それで出してしまう。それでも胃袋はサボってってですねぇ，日曜日で胃袋教会行ってたなんてですよ，(笑い)それで腸のほう入っちゃう。目も色も臭いもですねぇ，味も全部チェックされた，胃袋さんもO.Kした，だけど，私としてはおかしいって腸のほうが脳のほうに照会しますと，脳が索引をして「いけません，出しなさい!!」今度下の方から出てくるんです。

そういうチェックのシステムというのは，この99.7％の長い長い経験歴の中から我々遺伝子の中で記憶されていると思うんですね。ところが，「ベンツピレン」だとか「ダイオキシン」だとかですね，「トリハロメタン」だとか，「四塩化鉛」だとかって，多くの場合発癌物質です。入ってきてもチェックできないんです。あるいは，チェックしても対応の仕方がわからない，「これはベンツピレンに違いありません」。「どうしたらいいでしょう？」「どうしたらいいかわかりません，まだ情報として記憶されておりません」これが情報として登録されて，遺伝子の中に登録されて，遺伝子の中に処置ができるようになるのに最低1000年かかるそうです。間に合わないですよ，今。この長い長い狩猟文化の歴史というのは無視できません。だから例えば，アメリカの動物学者・文化人類学者のポール・シェパードという人は，「20歳までは野外活動させなさい。博物学教えなさい。20歳になったら物理学と数学教えなさい。」と非常にユニークな言い方しているんですね。スタンレー・ホールという教育学者がおりまして，今大学で教育学を勉強なさってもほとんど登場しない方だと思われます。19世紀の教育学者なんですけど，この方は『再演説』といってあれはエルンスト・ヘッケルというドイツの学者でしたかしら，人間がお母さんの母体に受精してですねぇ，子供として生まれてくる十月十日の間に，生物の進化

の過程を，全部なぞるっていう学説を唱えたんです。これには今反論もあるんですけど，例えば，尻尾がある，エラがある，やがて尻尾が消えてですね，エラが肺になって，右心室・右心房，無核の赤血球というような形で生まれてくるのです。人間の系統発生は，進化の歴史を再演するっていう『再演説』です。

スタンレー・ホールは，これを生まれた子供が大人になるまでの間にもう一度人類の文化史を再演するという考え方を言っております。ただ，ホールの考え方は子供の発達を個々の段階でしか捕らえていない，子供の社会性というのを捕らえていないものですから，今この学説は古い学説だというんで，ネグられているんですね。ですが，私はそのホールの再演説とポール・シェパードの狩猟文化の大事さというのをいっしょにして考えると，生まれた子供が成人するまでの間に，やはり狩猟体験＝縄文体験，弥生体験＝粗放農耕の体験ですね。そして，例えば，中学の高学年か高校生くらいの間にですね，近代文明にどう対応していくかというような能力をどう身に付けていくかというような，教育のプロセスというのはすごく大事です。そのためには，少なくとも12・13歳くらいまでは野外を飛びまわらせるというような教育の過程というのは，最も大事なのじゃないかと思います。

アメリカの環境教育の中に「インタープリテーション」という概念がありまして，これお話すると長くなりますが，その中に12歳までの子供については特別なやり方がある，というようなことを言っているのです。私は，例えば，よちよち歩きの頃は哺乳動物と同じ段階だ，蟻んこを踏み潰してもミミズをちぎっても，罪の意識も何にもない。だけど，少し大きくなって猫踏み潰そうと思ったら，猫ひっかいて噛みつかれる。猫ちゃんに噛み付かれてワーッワーッ泣く，ひっかかれて痛い。そういう体験からですね，ミミズさんちぎっちゃたけど，ありんこさん踏み潰したけど，猫と同じで，どんなに痛かったろう，どんなに苦しかっただろう，というようなことが理解できると「惻隠の情」のようなものが生まれてきます。そういう過程がとても大事じゃないか。

私，野外活動の時に小学校の低学年までは，なるべく自然体験，殺戮の体験もある程度容認します。まだ殺すということの善悪のけじめがつかないうちは，仕方がない必要悪として容認している。だけど，ある程度，そういうことが理解できたら，殺すことが非常に良くないことだ，ということが理解されてくる。小学校の中学年くらいは魚を釣って調理をして食べる，小学校の5．6年生から中学の1年生2年生くらいまでは，鶏を殺して血を抜いて，毛をむしって，それを調理して友達と一緒に食べる。生活の原点回帰ですね。狩猟人はみんな獲物をそうやって手に入れて，クッキングの前の段階にこしらえるというプロセスがある，それを体験する。大学卒業して社会人になる前にですね，屠場の見学を是非させたい。屠場に行きますと，豚だとか牛だとかみんな殺されます。血まみれになって生皮はがれて死にますが，これが私たちに供給される，あの美味しいしゃぶしゃぶもですね。ハンバーグもステーキも，みんなこういうプロセスで，我々の口に入って我々の生命を支える。ベコの子・牛の子・マダラの子も，モウモウ・メイメイ森のこやぎもですね，コケッコーのおばさんもですね，家畜である限りは最後には血まみれになって殺されて，我々の生命を支えるんだと，そういう体験を是非させたいと思います。そういう意味で私は子供が自然に触れることの意義というのは極めて大きい。特に，今のように自然疎外の世界の中で育つ子供には，むしろ意識して首に紐つけても子供を自然の中に引っ張り出すような，私たち大人の側の対応が大事なのではないかなと思います。時間がありましたら，また補足をさせて頂ければと思います。どうもありがとうございました。

平野：それでは続きまして近藤総子先生。以前から非常に感性の高い詩集をおだしになっておりますけども，実は今柴田先生のお話でもちょっと触れましたが，約20年くらい前から「ダイオキシン」の問題に取り組まれておりまして，ダイオキシン最近になってやっと国内でずいぶんいろいろと言われるようになったのですが，その以前からいろいろ取り組まれております。そういう環境の問題にも深い関心をお持ちの先生でございます。本日は子どもと，カウンセリングを取り上げてお話下さい。

近藤：子供の発達環境における諸問題への対応のひとつとしての，芸術療法の可能性について，私見を述べたいと思います。現代はいろいろ否定的な言

い方がされていますが，私の感じるところでは，対人能力，感性，情報処理能力など，人間としての子供の能力は確実にアップしてきていると感じられます。けれども，社会的あるいは文化的な環境が急成長したために，特に 50 年間社会全体が精密化・精緻化してきた，そのために子供が生きにくくなっている。たとえて言えば，鳥の羽がみんな剥げてしまった赤むけ状態，といった感じで子供が高いストレスにさらされて，そこでいろんな問題が起こってきていると感じています。このような状態に対して，どう道筋を立てていくか，私が取り組んでいることをお話させていただきたいと思います。

具体的には三つのことを駆け足で述べたいのですが，第一には，『ダイオキシンノ降った街』という児童書を書いたときに私が体験した「不思議な力」について。第二には「心のホメオスタシス」という，カウンセリングの全行程を一瞬の気づきによって体得する，私が開発してきた方法について。そして第三に，一瞬の気づき“自我の枠から自由になる”というカウンセリングの目標を，芸術療法ではどのように，子供たちや私たちを，治癒に向かわせることが出来るかについて，お伝えしたいと思います。

では第一に『ダイオキシンの降った街』という本を書いたときのことについての話です。私は十五年ほど前に，ジョン・G・フラーというアメリカの科学ルポライターが書いた，邦題『死の夏』というセベソ事件のルポを読み，ことの重大さを，主婦や子供，みんなに伝えたいと思いました。セベソ事件とは，1976 年に北イタリアのセベソで実際に起こった，化学工場の爆発事故により副次的にダイオキシンが空から街中に降ってしまったという事件です。私はこの本を資料にして，ダイオキシンの特性や恐ろしさについて，小中学生にもわかってもらえる創作物語を書きました。けれどこの本は，ダイオキシン災害の恐ろしさを知らせたいという思いだけで，書けたのではありません。それよりもむしろ，私はもっと大きなインスピレーションに引っ張られるようにして，ある意味では自然にするすると，この本を書くことができたのです。それはどういうことかというと，たとえばこの本では，「二十万人の人が住む地域が重大なダイオキシン災害を受けたとすれば，二十万人全員がまるまる，疎開しなければならない」ということを，私は登場人物に語らせています。けれど，今から十五年前に，災害によって二十万人もの人が疎開するということがあり得るとは，私自身想像もつかなかったことです。まだ，チェルノブイリ災害はもとより，インドのボパールの化学工場の爆発事故も起こっていなかった時代です。当然補償の問題にもつながってきます。行政の措置能力をふまえずに，大量の人間を疎開させるという措置が決断されるなどということは，化学にも行政にも疎い私には想像を絶することでした。それなのにたとえ二十万人だろうと疎開しなければならない，という考えが湧くようにして生まれたことに，私は大変驚いたのです。また，この本のストーリーは，たとえばホフマン・ラ・ロシュ社という世界屈指の製薬会社に子供たちが駆けつける場面など，迫力があってなかなか面白いと言われますが，そういった物語の骨子を支えるエピソードの多くは，次々に自分の中に流れ込むようにして浮かんできたのでした。自分の力量を越えて，何か大きな力によって書かされている，そして物語自らが創造性に富みホメオスタティックにまとまろうとしている。私はこれまで詩や文章を書いてきましたが，そのような感覚はこの時が初めての体験でした。物語のアイデア，ひとつのフェイズ，場所・空間 …… そういう枠そのもののなかに自分の意識が入っていく。そして浮上してくるイメージを大切にしながら，内なる自己と対話をしていく。そこから新しくクリエイティブなものが引き出されてくるのです。この本が面白いといわれるのはそのせいで，その意味でもみなさんに読んでいただければと思います。最近，フォア文庫という文庫本になりました。カール・ユングは，アクティブ・イマジネーション＝能動的想像力として，無意識と直面する方法を語っています。シュピーゲルマンと河合隼雄先生が書かれている本『能動的想像法－内なる魂との対話』が創元社から出ていますが，想像活動を通してこそ自己治癒がもたらされるということを，ユングは自身の体験を通して，非常に重要なことと考えたと思います。この能動的想像法のひとつであるコラージュ療法の例を後でお話しし，ストレス社会に生きる子供たちへの処方箋の一つとしてご紹介したいと思います。

さて，第二に「心のホメオスタシス」についてお話し致します。

カウンセラーとして私は，不登校や摂食障害，親

子の葛藤，モラトリアムといった対人関係の問題や悩みのある方々にお会いしています。その中で私は，すべての悩みごとは不安とストレス（緊張）によるものであり，その意味ではどんな悩みもみんな同じなのだということが，実感としてわかってきました。不登校でも摂食障害でも，中身は同じメカニズムだということ。息詰まった苦しくて不安な気持ち，先ほど平野先生が閉塞感とおっしゃいましたが，そういう，時代がもたらす閉塞感，その結果起こってくる心や体の緊張があります。よく不登校の子は頭やお腹が痛いと訴えますけれど，それは，緊張が高いために体の血液循環が悪くなり，胃や腸がこちんこちんになって，身体症状が出てきます。そういう心や体の緊張に「自分」が占領されてしまっているときに，人はカウンセリングを必要としているわけです。この不安やストレスを解消して，リラックスして自由な気持ちで楽に生きることができるようになる，それがカウンセリングの目指すところです。カウンセリングは通常，長い期間を要します。ところがそれを一瞬のうちに，一瞬の気づきによって会得することもできるということが，私は最近わかってきました。その方法の一つ，「心のホメオスタシス」の仕組みを理解する，ということをお話します。

科学者の中村先生の前に臆面もないことですが，ホメオスタシスというものは，もともとは生理学・生物学の領域で用いられた言葉で，日本語では“恒常性”といわれています。恒常性とは，生物が絶えず安定した調和的な状態でいることを志向し，それに沿って動くという，本来的に生物が持っている性質を指しています。たとえば，暑いときに人は汗をかきます。汗をかくことによって体温を調和する，それが生理学上のホメオスタシス機能なわけです。そしてこれと同じメカニズムが「心」にもあるのです。

たとえば，上司に怒られるとムカムカして部下に八つ当たりをする，それが心のホメオスタシスです。上司に怒られたことで体の中の不安や緊張が高くなり，それを外に出して解消したい，というイライラ感がある。それで部下がちょっとした失敗をすると，ガッと怒る，そうすうることによってもともとの安定した状態・ホメオスタシスを保とうとするのです。受験勉強がはかどらなくて，むしゃくしゃして，たくさんお菓子を食べてしまうなども，自分の安定したホメオスタシスを保ちたい，そのための無自覚な行動です。ここで注目すべきは，心のホメオスタシス，“感情”が二つの行動の橋渡しをしているということです。上司に怒られた＝部下に八つ当たりをする，この間にはムシャクシャするという感情があります。また，勉強がはかどらない＝お菓子をたくさん食べる。この二つの行動は，イライラするという感情が次の行動を決めています。このような感情の流れの因果関係の存在に気がつくこと。それが「心のホメオスタシスを感覚としてわかる」ということです。これは，感情を見る鏡を手に入れるようなものです。ポケットに手鏡を入れておいて，ちょっと出して自分の顔を見る。「相当ストレスがたまってイライラしているな」そういう風に自分をみることができる。すると，少しちがった行動がとれるようになります。鏡機能によって自分のストレス状況が見えると，観察自我が働くようになるわけです。そうすると，「そうか，相当自分はイライラしているなぁ，もう少しゆっくりテンポを落とそう」という風に，自分の態度を変えることができるようになります。ありのままの状況を受け入れて，自分を許す，待つ，そういう行動が起こってくるわけです。

このようなプロセスを宗教団体などでは，「自執の念を捨てよう」などと教え諭しています。とらわれている自分をもっと広く保とう，そういう価値観の変換のすすめです。けれども，そういうやり方では，抑圧的になりやすい。そして頭ではわかっているけれども我慢できない，「わかっちゃいるけどやめられない」ということになってしまう。つまり理性（頭）でわかるのみではなくて，感性（身体）でわかることが必要なのです。心のホメオスタシスの仕組みを，感覚として理解し，自由な自分が獲得できるということ。それが，自分の存在全体の枠をはずす，特定の価値観でがんじがらめになっている枠を，ポン，と外すということなんですね。すると初めて，いろいろな状況に対する「耐性」＝耐える力が高くなってきます。そこで自分の態度が変わる「態度変容」という，カウンセリングが目標にしていることが起こるわけです。

話を少し戻しますが，心のホメオスタシスは自分のことだけでなく，他人との人間関係でも同じことがいえます。たとえば不登校などは，きっかけは

様々ですが，対人能力・友達とのつきあい方の能力が年齢相応でないために生じる，対人ストレスが原因で起こる場合が多いと感じています。最近は年々不登校が増えていますが，だからといって子供の対人能力そのものが低くなっているということではないと思います。昔と比べると，子供のいる環境が，対人能力のなさをカバーするゆとりを失っている。社会のストレス状況が，今はそのまま子供の生きる環境に直結してしまっているのです。子供たちは，ストレス源である人間関係から楽になりたい，というホメオスタシスによって腹痛や頭痛が起き，不登校になります。ここで，子供を取り巻く環境にゆとりがあれば，子供はそこで一休みして，対人能力を調整できるわけですが，現在は親御さんも，子供の不登校によって，自分の育児が失敗したのではないか，という育児不安にさらされ，ストレス状況に陥ってしまいがちです。すると，親のホメオスタシスとして，なんとか登校させようと必死になってしまうのです。こうならずにここで親御さんが気づいて，自分と子供それぞれのホメオスタシスが見えてくると，その違いが理解できるようになるわけです。すると，親御さんは，子供のストレス状況を理解・共感できるようになります。そして，子供の不登校を許し，待ってあげることができるようになる。親自身の態度が変わっていくわけです。すると，子供はゆったりと休むことが出来，自然治癒力を高め，耐える力，対人ストレスへの耐性を高めることができるようになります。

心のホメオスタシスのずれは，人と人の間だけでなく，環境と個体の間にも起こります。私は，日本という大きい自然環境と，個体のホメオスタシスの間にずれがある，ということを痛感しています。たとえば，先ほどの柴田先生のお話にありましたが，肉を買ってきて食べるのには抵抗がなくても，まず鳥の首をひねってから羽をむしる，あるいは屠殺場を見学してから肉を手に入れる，ということは今の子供たちや私自身にとっても，違和感があることです。つまり，肉を食べるためには，生きている動物を殺さなくてはいけないという，隠れがちだった環境全体のホメオと，個体のホメオとがずれている，と感じるのです。

二十世紀は，科学技術の進歩や資本主義原理が尊重されてきました。そこでは「競争」という，エネルギーを互いに奪い合う原理が支配していました。二大勢力の対立という構造がなくなって，それでふっと私たちは環境と個体のホメオのずれを感覚的に実感するようになった。このとき私たちは，エネルギーを互いに奪い合う「競争原理」ではなく，むしろエネルギーを分け合って生きるという「シェアリングの原理」が，自然な気づきとして，生まれてきていると感じます。子供のホメオスタシスを守るためには，微視的に発達環境の問題を見る ― ダイオキシンを取り除いたり，いじめの起こらない学校にするだけではなく，環境全体・地球全体や宇宙のホメオスタシスに気づくことが大切です。互いの関係調整やシェアリングが必要な時代になってきたのです。

さて第三に，芸術療法についてお話し致します。自分の感覚や感性をアンテナにして，心のホメオスタシスを見ていくことによって，人はしばられている価値の枠組みをはずしていける，ということを申しました。しかし，実感としてわからない，と思われる方もおられるかもしれません。確かにそれ故に，カウンセラーは長い時間をかけて言葉によるやりとりを行っていくわけです。しかし，子供の場合や，感性や右脳意識の高い人は，言葉ではなく，箱庭療法やコラージュ療法，詩の朗読，といった芸術療法になじみやすいように思えます。感性をこそ道具に，自分自身の精神と内的な対話を持つことによって，自分の意識の世界を拡大して，創造性を高めることができる。創造的な活動ができると，自我の縛りから自由になり治癒がもたらされる。これが芸術療法のエッセンスであると思います。

ここで，芸術療法の例として，コラージュ療法の一部を簡単にご紹介したいと思います。

コラージュ療法とは，広告や本のカラーページなどの，自分の気に入った写真や絵を切り抜き，画用紙に貼り付けることによって，いま描きたい自分の内的な世界をつくる作業をしていく心理療法です。ここにお見せするコラージュは，約 3 ヶ月間の短期記憶喪失の症状を呈し，徐々に治っていった思春期の少女が制作したものです。この少女は，理想とする“よい子”に自分を封じ込めてきてしまったために苦しくなったようで，精神発作をおこし記憶を失いました。いろいろと検査や診察を受けても異常はなく，心理相談にたどり着きました。そしてコ

ラージュ制作などのセラピーを行っていく中で，少女は「本来の自己」を取り戻し，自然に生きることを自分に許すことができるようになりました。このコラージュは，少女が回復期に作ったものです。プライバシー保護という問題がありますので，遠くからコラージュの雰囲気だけを理解して頂こうと思います。このコラージュは，上部の真ん中にスピリチュアルな感じのする雪を頂いた高い山があり，右端にはイルカの大群が気持ちよさそうに海を泳いでいます。絵の中央には堂々としたお城があり，豆粒ほどの大きさの人々があちこちを散策しているようです。緑豊かな前庭の水辺には，噴水が幾筋もの水を放っています。そして，画面の周りはいろいろな種類の木がこんもりと置かれていて，全体を包んでいるようです。豊かなうるおいが感じられるコラージュです。「対人不安」が強いあまり，自分を“よい子”にはめてしまった少女がいま，その枠を越え自分自身の感覚を通して，内なる自己との対話をして新たな力を発揮しはじめている様子が伝わります。

現代という発達環境において，子供は高いストレスにさらされているために，諸問題が起こってきている。このストレスから自由になるための一つの方法として，自身の感性を通して，内なる自己との対話をして創造的な力を獲得することができる。この「能動的想像の不思議な力」は，詩や文章を書くときに威力を発揮することがある。また，心のホメオスタシスのメカニズムを感覚としてわかることは，しばられている価値観の「枠をはずす」ので，瞬時にして治癒をもたらすこともできる。一方コラージュなどの芸術療法においては，とくに子供は意識と深層の意識を自由に行き来する知覚や直感に優れているので，ホメオスタティックな自然な自己を容易に表現することができる。今後はさらに，環境全体のホメオスタシス，宇宙的なホメオスタシスの存在を，身体感覚のホメオと対話させて，シェアリングをしていく時代になると思います。ご静聴ありがとうございます。

平野：また，後ほど補足の時間があると思いますので，その節はよろしくお願いします。引き続きまして中村桂子先生にお願いいたします。中村先生は生命科学のほうで非常にご活躍の先生でございまして，お名前をご存知の方大勢いらっしゃるかとおもいますが，本日は 2 年ほど前にお書きになりました，今日の先生のタイトルそのままの本が岩波書店から出版されております。『科学技術時代の子供たち』という本ですが，今日はこれをめぐって，お話うかがわせていただきます。

中村桂子：異分野の方に 20 分間でお話をするのは，なかなか難しいのですが，試みてみます。もうひとつ，言いわけから始めるのはいけないことと充分承知しながら，私は子供のことは全く専門ではないことをお断りしておきます。生きものといってもバクテリアやムシなどを扱っているので，人間の子供のことは全く専門家ではありません。ただ，平野先生から御紹介頂いたように，たまたま，岩波書店が子供を考えるシリーズを出し，その中で科学技術時代のことを書きなさいと河合隼雄先生から命令をされまして，逃げまわったのですがつかまりました。ところが，書いてみたら，やっぱり私も一人の人間だ，人間の子供のことを真剣に考えなければいけないとをつくづく感じました。そのようなところでお話させていただきます。

実は，お二人の先生のお話を聞いて，ちがう分野と申しながら，柴田先生・近藤先生のお話は全部私の分野と重なると思いました。ですから，その気持ちも含めて聞いていただきたいと思います。

今，科学技術時代といわれまして，子供がコンピューターにのめりこんでしまったり，毎日テレビに毒されてるなど，柴田先生がおっしゃったようなかたちでの本当の自然に触れることが少ないと，そういうことが大変問題になってます。確かにそのような個別の問題は考えなければなりません。けれども，本当に大事なのは，科学技術時代がもっている価値観が，生き物に合わないというところではないかと思っています。

20 世紀はたいへん素晴らしい世紀だったとも言えます。特に科学技術の分野にいると，ジェット機も飛ぶようになり，宇宙まで行けるわけですから「凄い」と思います。一方，問題も残しました。その問題になったところを考えてみます。例えば産業でいうと，今申し上げたコンピューター産業・宇宙産業は素晴らしいのですが，農業はどうだろうと思うと大変問題をかかえています。それから健康・医療も私たち納得ができるようにはなっていない。それから環境も今までの先生方のお話にあったことで

す。それから，教育。こういうところがどうもまずいと思っているのでが，それは全部生き物が関係しているところなのです。つまり，20 世紀の科学技術時代の考え方と生き物とが合わないところがあるということでしよう。そこで 21 世紀はそこを考えていかなければいけないと思っております。考えることはたくさんあるのですが，子供に対する影響を特に考えて，科学技術が持っている価値観が生き物と合わないことを，3 つほど挙げてみます。

1 つが，「効率」です。その基本にあるのは，進歩が良いことだという価値観です。これは 19 世紀から 20 世紀にかけての基本的価値観だったと思います。進歩しようと思うと効率がいいほうが良いわけです。しかも，できるだけ均一なものをたくさん作る。これが，現在の科学技術を支えている基本的価値でしょう。ところで，生き物も段々いろいろなものを作ります。一箇所に留まるのではなく，様々なことをやっていこう，あれこれ試みて進んでいこうとしています。それを「進化」と申します。「進」が入っているので，あまり良くないのですが，英語ですとこれは [evolution] で，と言いまして [evolve] は，絵巻物を開く，“展開”です。後で生命誌という自分の仕事の中でお話しますが“展開”がよいと思います。生き物が展開していく時に大事なのはプロセスです。一刻も早く何かをやろうなどということはありません。自動車を最も効率良く作ろうというときには時間縮めるわけです。生きもので時間縮めるのなら生まれたらすぐ死ぬのが良いということになります。生まれてから死ぬまでの間のプロセスが生きているということですから，これ無駄だらけですけが，生きものからここをなくすのは無意味です。プロセスを経て，いろいろなことやりますと，「多様」なものが生まれ，そこで大切なものは「質」です。とんぼとネズミと桜の木を並べて，どれが良いかと比べてみても意味がありません。とんぼはとんぼで，桜は桜。「質」です。

もうひとつ生きものと技術のつくる機会の違いをあげます。機会は構造と働きがわかればよい良いわけです。しかし，生きものには歴史性と関係性があります。

今，農業や医療がなぜ駄目かというと，生き物を扱う分野なのに構造と機能だけで見ているわけです。今の医療，細かいことを見れば，そうでないこともあるわけですが，短時間ですので乱暴にくくりますと，今の医療は人間の構造と機能だけを見て進めていると言ってもいいでしょう。で，それは機械と同じです。生き物を見ようとしますと構造と機能も大事です。ガンの様子や血圧も大事ですが，歴史性と関係性がそこにあるわけです。プロセスがあり，多様化していくわけですから，歴史性と関係性が大事です。どうやって今の状態になったのかということです。先程申し上げた環境，教育も同じです。ジェット機は効率，構造，機能で結構ですが，教育や環境や農業はプロセス，歴史性，関係性を考えましょうということです。そのために，生命誌を始めましたので後でお話します。

二番目に申し上げたい科学技術に関する価値観は，「答え」が必ずあるという考え方です。しかも，唯一の答えです。何にでも答えがあり，それはたった一つである。けれども，これは科学という学問に対する大いなる誤解です。実際に科学をやっていますと，科学の中で最も大事なのは何かと言われれば，「答え」ではなく「問い」だということに気づきます。偉大な科学者と言われている人達の伝記を読めば，すぐ分かるのですが，誰も思いつかなっかったことを問うた人が良い仕事しているのです。「問い」から出てくるのは仮説ですね。科学をやっていて，一番幸せだと思うのは，間違ってもいいということです。例えばニュートンは偉大な発見をしました。しかし，今私たちは量子力学を知っていますと小さな世界ではニュートンの法則はは成り立たないということはわかっている。でも，高橋先生がなさる建築の世界はニュートンの力学で動いていても，私のような，ちっちゃな世界では，それは働きません。けれども，ニュートンの法則があるから次がでたわけですから，絶対正しくはないのだけれども，こんなふうにもものが考えられるよ，という新しい世界を考えていくところが面白い。ところが，現代は科学をそういうふうに位置付けていません。唯一の答えを出すものなのです。「問いを出す」ということを聞くと，ご専門の方はすぐお気づきになると思います。子供は“問う人”ですね。本当はそれをぐんぐん生かすのが科学のはずなのですが，科学は答えだと思われているので，正しい答えを出す，というところにウエイトがおかれます。そうなると子供は生き生きとしなくなります。近藤先生が「枠から自由

になる」とおっしゃいましたが，社会ががっちり枠をはめている。答えなんてないのかもしれないのに。

3番目に，“量”ということと関係あるのですが，何でも量にして，一本の物差しで測ってしまうということです。たぶん，柴田先生がおしゃった物理や化学が基本になっていて，本当の自然，本当の自然――複雑である自然をこれまで見てこなかったことに関係します。一つのものさしの象徴は，「偏差値」です。この価値観は生き物と全然あわない。実は本当の科学はこういう価値観をもってないのですが，20世紀は進歩を基本に置いたために，歪んだ科学技術時代になってしまったので，これを変えなければいけないと思っています。それにはどうするか。機械についての知識は19世紀から20世紀にたくさん蓄積されたけれども，生物の知識は不足しています。それをやらければいけない。科学はどうしても19世紀・20世紀型になりますので，歴史や関係性も入れた学問という意味で，私は「生命誌＝バイオヒストリー」を始めました。関係をいれるという考えを象徴する絵を，OHPで見ていただこうと思います。

生物の世界を扇形で表現します。「要」が生命の起源です。「縁」が現在です。起源は約40億年前です。いろいろな生き物たちが描いてあります。人間，大腸菌，きのこ，象も，イモリも。現在5千万種類くらい生き物がいます。けれども，DNAが生き物の基本だということは皆さんご存知だと思うのですが，つまり，何千万種いようが祖先は一つとわかる。私は父親と母親があったから生まれてくる。父親と母親はまたその祖先から。今，私が持っているDNAは必ず親からもらい，その祖先から来てますから，私のDNAを調べますと，祖先がわかってくる。それでどんどん戻れば起源まで戻る。きのこもずっと続いてきているわけですから，どんどん戻れば，同じ先祖へ戻る。ネズミもとんぼも同じです。それで，きのこのDNAと人間のDNAを比べますと，この辺まで同じ道を歩いています。動物と菌類が別れるまで。私のDNAときのこのDNA比べてみますと，同じところがあります。もちろん，違うところもあります。そうやってみますと，生き物たち全部が全部40億年の歴史を持っている。今，生きている生き物は全部同じだけの歴史を持っているわけで，人間が長いということはないわけです。しかも，全部祖先が同じですから全部お互いに関係がある。柴田先生は人類の祖先のからお話され，狩猟のお話になりましたけども，もっと戻っていただきたい。起源まで。私たち人間はあらゆる生き物たちと関係してここにいるんだということを今の生物学は明解に客観的なデータで解いていくことができるのです。

こういう感覚をもった途端に，科学技術時代の価値観とは違ってくる。たった一つの答えを出したり，効率良くやろうするのは，私たちが時間の概念を貧弱にしか持っていないからです。私は生物学をやっていて良かったなぁと思うのは，生き物40億年の歴史が，目の当たりに自分で感じられるわけです。それから，今日の新聞に「スバル」という日本が作った素晴らしい望遠鏡のことがのっていました。，あれは私の同級生が作ったのですが，ノイローゼーになりながら作ったのですが，「なんでそんなに苦労して作るの」と聞いたら，「150億年前が見えるんだよ」と言ったのです。彼の中では，もう完璧150億年という時間は自分のものになっているのです。150億年とか40億年とか，柴田先生のおしゃった人類の500万年・200万年という時間を身近にする，自然を調べていくとそれが実感として持てるのです。時計を見ながら，手帳を見ながら，「短い時間の中であくせく生きるのを止める」というのが，子供たちに，ある未来を与えることになるのではないかと思います。まだまだ，たくさん申し上げたいことありますけが，時間がまいりましたので，また何かの機会があったらお話させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

平野：高橋鷹志先生のお話は少し角度が変わりまして，建物と建築の角度からのお話を伺わせていただきます。よろしくお願いいたします。

高橋（鷹）：私は，工学部の建築学科で，住宅を始めとして，この世の中にあります様々な，実益の環境としての構築物が，個人の，生理とかあるいは心理，それからあるいは社会集団の人間関係であるとか，社会文化的な環境に対してどういう影響を持っているかというようなことを研究してまいりました。特に，子供の専門家でもございませんし，これは強調しておきたいのですが，私自身子供を育てたことがないので，どうも今日の問題に対してどの

程度の答えが出せるか，甚だ心もとなく，普段大学の講義でも非常に，不規則発言をしておりますので，何か最近，セクシャルハラスメントとか，大学の授業でも多少気を使うことが多くなって，本日も皆様に不快な感情を呼び起こすような発言があったとしたら，予めお詫びしておきたいと思います。

今日の私の題「お子様建築についての私見」。これは皆様これでおわかりのように，お子様ランチっていうのがデパートとか世の中のファミリーレストランにございます。つい先だって，私この近所に住んでおりますので，二子玉川の百貨店に参りまして，食堂を見てきました。ちょっと写真を撮ったのですが写りが悪くてお見せできないのですが，最近のファミリーレストランはお寿司とか洋食とか，食事の種類別にメニューが構成されております。そして，ショウケースを覗いてみますと，当然のことながら旗の立った「お子様ランチ」っていうのが正面に据えてありまして，そして，左右見まわしますと，右側にはなんと「お子様寿司」っていうのがございまして，お子様寿司にはさすがに旗は立っていなくて，金魚か何かの黄色いキンメダイみたいなお魚のついたおもちゃがお膳の上に乗っかっていました。また左を見ますと，なんと，「お子様膳」という和食風のものが陳列してありました。それを見て帰りにエスカレーターに乗ったのですが，皆様お聞きになっているかと思いますが，「良い子の皆さん，顔を出すと危険ですよ」と，「エスカレーターのそばで遊ばないようにしましょう」という女のアナウンスがございます。それを体験しまして，私，あれほど不愉快なことはないわけでして，すべてレジュメに書いてありましたように，私から言わせれば，子供に過剰に媚びたものではないか，という感じがして皆様どうお考えでしょうか。当然のことながらエスカレーターであのような注意があるということは，やっぱり手をはさんだりケガをする子供たちが多いからあのようなアナウンスが流れるんだろうと思います。

最近では，特に建築関係で，建築物が媒介となって，原因となってケガをした場合に訴訟に持ち込まれると，あるいは「ＰＬ法」っていうようなことがありまして，物的な環境が人間に対して障害にならないようにということに社会の関心もありますし，そうあるのか，ならないのか，まぁ，その結果だとは思いますけれど，そういった子供に過剰なサービスをするような環境は本当の建築だろうか，というのが私の結論であります。それでは何か，というような所までいけるのかどうか，ということはわからないのですけども，普段考えているところです。特に街を歩きますと，幼稚園あるいは保育所建築っていうのはすぐわかりますね。なぜわかるかっていうと，遊具が置いてあったり，それから窓ガラスにお花の絵が掛かっていたり，窓枠がピンクじゃないですか。あの変な色，様々な色，お化粧をしてありますので，誰が見ても，あれは幼稚園・保育所だってことはわかるのです。一体いつ頃からああいうデザインが，あるいはお子様ランチ風の建物が現れたのでしょうか。私あんまり歴史家ではないので，たぶんこれは近代の産物だったと思いますけども，かってはお子様向けの何々っていうのは世の中に決して存在しなかったはずなんです。すべて物理的なものとしてはですね，人間の力でもって子供の成長っていうようなものを支援していたはずなんですけども，なぜか近代になって何々用ということが，そういう設計思想が出てまいりますと，現在あるような幼稚園建築・保育園建築，あるいはその遊具というものが氾濫するようになってきたのです。

実は私今，新潟に勤めておりますが，新潟のあの大学のそばにルンビニー保育園というのがございます。ルンビニーていうのは，あのお釈迦様が生まれた聖地の地名をとった保育園ですが，日本女子大の小川先生の設計なさったものです。庭の片隅にですがこういう立派な遊具が最初からつくられております。で，この保育園に見学にいきまして，園長先生にお聞きしましたところ，この写真でも一人か二人の子供が登っているのが写っておりますけども子供たちはですね，こういったつくられた遊具はあまり興味を持たない，と。この幼稚園のおとなりにお寺がございまして，塀がなくてですね，周辺に樹木が植わっておりまして，子供たち何に興味を持つかっていうと，先程の柴田先生ではありませんけれども，その春夏秋冬ですね，その樹にとまっている昆虫であるとか，蝶々であるとか，そういうものを追っかけるのに夢中になってしまっているのです。あの設計者が非常に苦心してつくった，あの巨大な遊具というものにはあんまり注意を向けないというようなことがあります。というようなことで，子供たちが，

自ら発見して興味を持つと，このような仕組みが建築には必要ではないのかという気がいたします。

日本で初めての幼稚園，保育園は，あの御茶ノ水女子大学の附属保育園が明治 9 年にと聞いておりますけれど，たまたまその創立時の写真を白黒で見せていただきました。あの，はっきりおわかりにならないと思いますが，当然子供たちの寸法に合わせた，身体の大きさに合わせてですね，椅子の高さ，それからテーブルの高さ。それに子供たちが座っております。そういう面ではある意味で子供たちの身体というようなものの成長に合わせた用具の設計というものが必要なんでしょう。先程なりの話でいけば，この，テーブル・机の装飾が木で，彫り物をしているわけですけども，彫り物はおとなの使うものと全くそっくりのもので，お花が描いてあったりとかですね，子供たちが喜びそうな配慮が一切ない。おとなそのもののデザインになっております。それが背が低いので，一見すると非常に異様な感覚を持つのですけども，特に子供という高さ以外はですね，全て大人向けに作られたものを使わせている，ということがございます。

それから以前，東洋陶器というメーカーがですねぇ，日本でも戦後住宅公団が西洋便器の，日本の住宅に導入いたしまして，学校とか保育園・幼稚園でも西洋便器が必要だということで，幼児用の腰掛便器を開発したことがあるんですけれども，それもその子供の身長に合わせてですね，本当にかわいらしい腰掛便器を作って，発売しました。ところがいざ使ってみると非常に不評なんです。子供たちがこぼしてしまう，おもらしをしてしまうと。考えてみますと，その子供たちは家庭に帰ると大人用の西洋便器でちゃんと用をたしているわけです。自分の体にあった本当におままごとに使うような便器っていうのは，それが異常な体験でしてかえって使いづらいということがあるわけです。あれなんかも私の考えでは，やはり子供に過剰に合わせた大人の考えから出たもので，たぶん今ではあまり，あまりっていうかカタログに載っていないんじゃないかと思います。

御茶ノ水女子大学の，大正 4 年ぐらいの遊具っていうふうなもが写真がのってますけれど，これなんかも鉄の色そのものでですね，決して子供たちが喜びそうな色彩になっていないっていうようなこともこの写真でおわかりいただけると思います。そう考えてまいりますと，1700 年代に生まれまして 19 世紀の中ごろに死んだフリードリッヒ・フレーベルのことを私は思い出します。フレーベルはご承知のように，若い頃建築家を志しまして後に自分で設計した幼稚園・学校で自分が教えることになるんです。そして恩物，恩物っていうのは恩のあだの恩，ガーベと呼ばれている「教育融合」教育のおもちゃを，開発したことで有名でございます。彼はいろいろな学校を設計しましたけれども，例えば…これは西洋の住宅建築に一般にありますかたちでして，真ん中にホールがあって，それを取り囲むように必要な保育室があるというような，ごく単純なかたちのものであります。そういうことで，特に保育園・幼稚園だからと言って，それようの建築の部屋割りというものをあみだしたわけではなくて，当時どこにでもあった住宅建築そのものを学校に使っているわけです。それからこの中で，教育に使われる恩物というようなものも，いろいろご承知かと思いますが，抽象的な積み木を使って模様をつくったり，椅子であるとか生活用具を作るための教材を，教具をつくりだしたわけで，これなんかは，子どもたちは先程申し上げましたように与えられた遊具ではなくて，自分たちから主体的に見つけて，遊びにするというような子どものほうに主体性をかきたてるような非常に単純なさいころみたいなものを与えて，それで生活の建築をつくらせたり，あるいは家具をつくらせるというような，ま，そういう教育をあみだしたわけでした。ということは，そのヨーロッパのその教育の伝統の中でですね，建築を教材にしてそこから様々なことを学んでいくと，実物体験の伝統がこの辺からあらわれてきたのではないかと思います。そういったことで教科書から学ぶ，あるいは遊具を使って遊ぶということではなくて，非常に抽象的な，こういう教具によってですね，具体的な建築物から学んでいくということをもう一度見直す必要があるのではないかというふうに考えております。

そういうことから見てまいりますと，保育園あるいは幼稚園というような建築の原型は，やはり住まいにあるわけでして，たとえばこれも独自の教育観と数々の作品で有名な，ルドルフ・シュタイナーという建築家のつくりましたハンブルグにあります幼稚園ですけれども，これを見ますとヨーロッパの郊

外住宅の姿とほとんど変わらないわけです。プランはさすがに幼稚園でありますので，クラスター状のスタジオの保育室があって，それにホールが付いていると，構成自体もやはりホール型の住宅とほとんど同じものであります。クラスルームの中にキッチンがあったりして，非常に暖かい雰囲気のものです。ルドルフ・シュタイナーは，彼の建築哲学というのがあって，人間が欲するものですね，基本的な空間はコクーン，「繭」であるというふうにいっております。繭のようなものに人間がかこまれると，かって我々が母親の体内から生まれてきたようにですね，一種の落ち着きと安定性を持つというような主張がルドルフ・シュタイナーの中にあります。彼の建築では必ずこういった厚い壁で囲まれた繭のような空間がありまして，どんな建築にも存在するんですけども，これは西洋人の壁とか床によって安定的に守られた繭というような原体験があるのですけども，日本人はそうではなくて，日本人の原体験というのは書院造とか寝殿造に見られますような非常に開放的なところで，我々はひとつの落ち着き・安らぎを求めるんですけども，いずれにしても，文化によっていろいろな形式がでてまいります。住まいというようなものは，あらゆる建築の原型であるというようなことです。

ところが，近代になりまして，住まい以外の建築が世の中に氾濫し始めたわけです。ご承知のように今町を歩きますと，小中学校の建築，幼稚園・保育園・役所・病院というように，ある特性をかたちの中に，それようにつくられた建築というのが街の中に氾濫してまいりました。だからここでもう一度，住まいというようなものに立ち返ってあらゆる建築を見直す必要があるのではないか，我々が近代になって生み出した，建築のスタイルっていうのは，一つは廊下の発生です。建築の中に廊下が発生したっていうことが近代の我々の生み出した，先程の中村先生のお話ではありませんけれども効率・均質というようなことで，僕たちの学んだ学校は北側に廊下があって，南側に同じ教室が並んでいる。それが何クラスも続いているというようなそういう「均質空間」でつくられた学校なんかに行くとおわかりのように，そういった学校に適したプラン，病院に適したプランというかたちで世の中に様々な施設というのが氾濫してきたわけです。そういうものをこの際見直す必要があるのではないかという気がするのであります。ところが，問題は，さっきのお茶ノ水女子大学の保育園の外観などを見まして，明治・大正時代はですね，特にあれようの建築というような，その近代の産物である「施設」というような建築型はありませんでしたので，こういうどこにでもあるような建築用のスタイルが保育園に使われていたということです。それからあの，創立当時の写真を見ましても，今現在のようなかたちであり，これが幼稚園だとわかる痕跡は何もなくてですね，ごく一般の住宅建築というようなスタイルであったわけです。それが例をあげれば切りがございませんけれども，北海道にありますイガイ保育園というような大正時代につくられた，古い木造の住宅建築のスタイルをそのまま保育園に使っているわけであります。今の平面図を見ますと，これ非常に単純な平面でして，真ん中に集まる場所があって，その周辺に保育室があるという西洋の住宅の形，あの頃は西洋建築を日本に輸入するということが盛んでありました。こういった西洋の住宅のスタイルをそのまま保育園に使ったというようなことです。

さて，住まいを様々な建築の中心におこうとしたときにですね，一番問題になるのは現在我が国の住宅というようなものがどういう状況にあるかということです。僕たちの住まいというのは，例えば今でも各地に残っておりますけども，土間をもった農家の住宅というようなものが，我々の庶民というか一般の人の住宅として，これまで盛んにつくられてきたものでした。大正時代に先程お話しましたように，住宅の中に中廊下がつくられてくるのですけども，こういった中廊下型の住宅というようなものを経て，現在我々が住む現代建築があらわれてくるわけです。例えば，これはたまたま今朝の新聞のチラシで，入ったものをそのままコピーしたものですけども，現代の住宅っていうのはこういう玄関がありまして，廊下があって，そこにいくつか複数の部屋が並んでいる。というような専門の用語で言えば「NLDK の住宅」―― 何個かの寝室とリビング・ダイニングというようなかたちのもの。マンションでいえばどこにでもありますような，真ん中に水場があって，いくつかの部屋がつながっている，というふうなかたちの住宅なのです。住宅の原型というのは，房になっているところは各部屋で，その真ん中

にみんなの使う場所があるというふうなかたちで，集まる場所と各個人がプライベートで使う空間というようなものが，西洋の住宅もそうですし，日本のその開放的な住宅も上のようなスタイルのものだったかと思いますが，現在ではそれは独立して，各部屋が扉によって区分された下のようなかたちに変わってきてしまっているわけです。そういうことで現在の住宅というような間取りなり構成は，かってシュタイナーが保育園・幼稚園建築に住宅を越えないようした，というようなかたちでの利用の仕方はできないわけです。言ってみれば戦後，僕たちは住宅の原型というものを見失っているのではないか，というのが私の感想なわけです。住宅というものが子供たちの，保育園・幼稚園の原型にならないとすれば，どんなことがあるだろうかというふうなことを，その例を最後にお見せいたします。これはトトロ保育園，都立大学の若い建築の先生が設計されたものでして，ここでは一切間仕切りはなくてですね，保育室と遊戯室というような，ふたつがただつながっているだけのものでして，オープンな空間をみんなで使っていこうということです。ここで私は何をいいたいかと申しますと，これまで住宅であるとか，病院であるとかあらゆる建築，それから先程の「お子様ランチ」の例もそうでありますけども，すべて近代の人工物というようなものは，効率・能率を求めてですね，何々用に作られているというようなことであったわけです。この保育園ではですね，何々らしさを一切廃止して，子供たち入ってくると「おやこれ何だろう」というような興味をかきたたせるような，ここをどうやって使っていったらいいだろうか，なんていうことですね。ケアーする側，それから父母あるいは子供たちも含めてですね，みんなで考えていけるような仕組みがここに存在しているのではないか，というのが私の見方なわけです。そして，外観はごく単純で，何の建物かわからない。能舞台，と言われれば能舞台でしょうけれども，あのような巨大な，巨大な木造のジャングルジムのような外観をしておりますし，内部に入るとこれ遊戯室のほうですけれども，唐傘のような，今までの建築スタイルでは全くないようなところで，子供たちはそれぞれ，それぞれの場所を見つけて楽しんでいます。大きいほうの遊戯室は，これも巨大なジャングルジムのようなことで，普通の幼稚園・保育園ですと「あれが危ないじゃないか，」って皆さん心配なさるんでしょうけれども，この園長さんは，危ないことを知ることが，子供の教育にとって一番大切なんだ，と。あそこから落ちて初めてですね，「これは危険だ，」というようなことを知ると，そういうことを言われております。ですからこういうものが成立した背景には，そういった理解のある園長先生，それからそれを，そう受けてとって，子供たちと共に考えていくような空間を設計した建築家の力というようなものがこれを成立させたのだろうと思います。時間を超過いたしました。でも，こういった 21 世紀に向けて，いわゆる何々らしさを排した建築物，あるいはそれに応じたみんなで参加できるような環境というようなものが必要ではないか，というのが私の結論でございます。

平野：ありがとうございました。4 人の先生方にひととおりお話を伺ったわけでございますが，それぞれ話の時間の関係もございますけども，さらに補足を頂けるかと思いますので，もしございましたら 5,6 分をめどにお願いしたいと思いますけども，柴田先生，よろしくお願いいたします。先程スライドということをおしゃっていたんで，ぜひ，よろしくお願いいたします。

柴田：貴重なお時間いただいて恐縮でございますけども，やっぱり「百聞は一見にしかず」ということで，ちょっと衝撃的なスライドをお目にかけてと思います。

スライド 1. 筑波大学の小田晋先生（社会犯罪学の先生）がお調べになった東京 23 区内での，犯罪者の多い少ないと，緑の多い少ないとの相関を求めた表です。一番緑の少ない千代田区がですね，千人中百人くらい犯罪者がでているんですね。比較的みどりの多い，練馬・足立・江戸川・葛飾っていうのは千人中 17 人くらいですね。緑が少なくなると人心が荒廃する。アメリカの環境教育法の冒頭にですね，「国土や自然の荒廃が，国民の士気と倫理を低下させる」と言っているのですね。モラルとモラールを低下させるってそう言っておりますが，これまさにそうです。これで非常に示唆的なのは，実は千代田区に広大な緑があるんです。ただし，この緑は「アンタチャブル・グリーン」です。天皇のお誕生日とお正月しか入れない。もし皇居を開放しますと，板橋区・文京区と同じくらいですね，千人中 20 人

くらいなるはずなのに。だから，どんな立派な緑があっても，入っちゃいけない，取っちゃいけない，触っちゃいけない，登っちゃいけない，というアンタチャブルな‘べからずパーク’だったら意味がないということです。もう一つ示唆的なのは，荒川区・北区・墨田区・江東区というのは緑が少ないのに，犯罪者少ないのです。これは向う三軒両隣の地域コミュニケーションが非常に行き届いているということなのです。それとたぶん行ってみるとわかりますが，小さなトロ箱にですねぇ，盆栽だとか朝顔だとかそういったものがいっぱい植えてあるような空間があって，子供たちが路地を通って来ると，「おばあちゃんの風邪，どうなったぁ？」「ありがとう，元気になったよ」とかいった，そういう会話，コミュニケーションが非常に行き届いている。

スライド 2. これはちょっと古いんですけど，全国都道府県知事会議の時に出た資料で，上のほうの日本地図は，全国で緑が急激に減少していった都道府県，下のほうのは中学校で校内暴力が多発した都道府県です。みごとに整合します。大阪真っ黒けですけど生徒の問題もそう。関東地方も軒並みです。東北の杜の都仙台が都市化が進んで校内暴力出ている。ちょっと異質なのは千葉県です。千葉県は，校内暴力がでてないのです。子供がおとなしいかというとそうじゃない。先生のしめつけが厳しんです。だから，中学の体育系の先生で空手何段，柔道何段っていうような先生がですねぇ，「おまえら中じゃりのくせにガタガタいってただじゃおかねぇぞ」といって，（笑）強力なしめつけが行われている。

スライド 3. これはですねぇ。高橋先生のお話の中で，子供は危険であればかえってそのほうが教育的だということで私どもも危険であればあるほど教育的な意義が高いという考えで，これはすずめ蜂をキャンプのときに手にとまらせる，というプログラムです。何でそんな馬鹿みたいなことしているかというと，多くの人は蜂は刺すものだと誤解しているのです。蜂は人を刺すために生活しているんじゃない，忙しくて刺している暇なんかないんです。ところが人間のほうが勝手に蜂は刺すものだと決めつけて蜂がくると手を振ったり体をこう動かしてよけようとするから，蜂は自分が攻撃されたと認識して，仕方がないやむおえずに刺すのです。蜂は憲法第 9 条きちっと守っている。戦守防衛なんですね。（笑い）それを人間のほうが勝手に刺すものだっていうから，そうじゃないんだよということを認識させるため，手の上に蜜を塗って蜂を誘致します。その間はフリージング，全然動かない，とまったらですよ，1 秒間に 1 センチぐらいのスピードで動かしますと，蜂はですね，こうゆう動きには反応しないのです。それで，例えばこれ，4 年生の男の子ですけど全然平気です。「くすぐったいけど，かわいいね，」って。

スライド 4. それからこれは，キャンプのときに朝，パンにマーマレードやジャムを塗りますと蜂が来てとまります。これ一緒に食べようよ，“パンタベリー大僧正”なんていってね，(笑)一緒に食べちゃっているんですね。

スライド 5. この子はこんなとこにジャムが付いているんで蜂がとまちゃった。じっとしてれば刺しはしません。絶対逃げちゃだめだよ，動かなきゃ刺さないよ。

スライド 6. このリーダーは一緒に食べて，これまさにパンタベリー大僧正ですね。

同じように，ヘビも，何でヘビ，みんな気持ち悪がるか。ルナールはヘビは長すぎるって言ったのですけれども，何でヘビをみんな気持ち悪がるかっていうと，あれは上から見ているから長すぎるんで，真正面から見れば実にかわいい顔している。

スライド 7. この子は，生まれて初めてヤマカガシにあったのですけれど，これ気持ち悪いかどうか，認識する価値判断の基準がないんです。こういうとき幼児はどうするか，尊敬する大人，先生だとかリーダーだとか，お父さんお母さん，その態度に迎合し模倣するのです。だから，お母さんこれ見て，「きゃー」っていって「やだ，もうそんなことしたら家入れないから，おやつなんかあげないから」って言ったら，子供はいっぺんにヘビ嫌いになります。「あら，このヘビちゃんかわいいわね，真正面から見てごらんなさい。すごくかわいいわよ。」って言うと，子供はヘビは愛すべき生き物だと認識する。すぐインプリントされます。これもそうです。この子はですね，私と一緒に小さい時から育った子ですけれど，ヘビの持ち方をちゃんと心得ています。四本の指で喉のところを押さえて，親指で頭押さえて，横向いてて噛み付かないようにするのですけど，この四本の指軽く動かしてですね，喉のとこ刺激を与

えますと，ヘビは喉のところに圧反射の中枢があるのですねぇ，そうしますとね，おとなしくなります。こっちの手で支えてやる。よしこちゃんの顔をごらんください。非常に複雑な顔です。これはねぇ，大人からヘビは忌むべきものって教わりながら，子供自身のこの時の感性は，おもしろいねぇ，って気持ちでみんなおもしろがってですねぇ，私も触りたいんだけど，触ったらお母さんに叱られるんじゃないかなぁ，と実に複雑な心の葛藤が顔に出てます。この時に無理やりよしこちゃんにヘビを押し付けちゃいけない。よしこちゃんが自ら触れるように仕向けていけばですねぇ，よしこちゃんヘビ好きになっていくだろうと思います。

これはかなり極端なんですけど，マムシを手にのっけちゃう。マムシだって人をかむために生活しているんじゃないんです。あんなちっぽけなヘビが人間を噛み倒して呑もうなんて思うはずがない。マムシは大変な近眼でしてねぇ，人間の接近に気が付くのがいつも遅いんです。そうすると，逃げようと思っても逃げる暇がないから必死の思いで噛むんですね。それ知っていれば全然怖くない。扱い方を一つ，ただし，これやたら真似しないでください。相応の知識と技術が必要です。リーダーとしてですね。これ，マムシを手に乗っけて全然噛みません。もし噛んだらどうするか，噛むとき必ず，ポーズとりますから，ポーズとったら，パッと放せばいいんです。そんなふうにしてマムシちゃんの勉強をしてですね，今さよならってやってるのですけど，（笑）マムシは身長の 3 分の 2 の長さまでおそいかかります。宙を飛んでおそいかかるなんて，絶対そんな筋肉持ってないんです。したがって 60cm のマムシだったら 40cm はなれてればもう大丈夫です。そういうことがわかればちっとも怖くない。私が保定してみんなに触らせます。ヘビちゃんはぬるぬるしていると思う人，って言うとね，たいてい 4 分の 1 か 3 分の 1，手を挙げる。「触ってごらん」「ざらざらしてる」どうしてだろう。ルーペで見ると，ヘビのうろこは，マムシのうろこは全部一枚一枚真ん中に突起があります。松かさのようにガサガサしているんですね。だからザラザラしてるんだよ。マムシのお目めは猫のお目めのように縦に細い。マムシは毒を持っているから，それじゃ毒の牙見せてもらおうよ。ついでに毒も出してもらおう。ピュピュって毒液，乾くとですね黄緑色の結晶なります。どこまでがお腹で，どこまでが尻尾だろう。ここまでがお腹で，こっから先，尻尾なんです。オスかメスか上から見てわかります。メスは卵巣が発達しております。オスはこの，尻尾の付け根のとこにヘミペニスという，交尾器 2 本をしまう袋があるから，膨らんでいるのですね。そんなことお勉強して，「マムシさんバイバイまたね〜」，ってですね。ちっともマムシがいむべき存在ではなくなるんですが，ただ，これは大変な冒険です。

スライド 8. これは三浦半島の城ヶ島のもので，これお正月 1 月の行事で海の中に落ちちゃた子がいるんですね。僕はね，「今年初めて水泳をやった，この栄誉をたたえよう」なんて言っているのです。これは丸木橋なんですけど，下が海ですから，落っこてもケガしないんです。背がたたない。ここへ来るとみんなして，「日本他人の不幸を喜ぶ会」っていうのをやろう。（笑い）落っこちた子があったら手たたいて。私どもは全部，定期だとか手帳だとか全部取りはずして，いつでも着衣とともに飛び込めるようにする。ジェスチャーとしてね，やっぱりリーダーは落ったら瞬時に飛び込んで救う，というのはジェスチャーとして大事だと思うんですね。リーダーが子どもが落ちたのに手をこまねいて見ていたなんていけません。延べ 250 人くらいの子供が渡って，落ちた子，一人もいません。この極めて「教育的な丸木橋」は，台風で流れちゃって，残念ですね。どんな渡り方をしてもいい。よつんばいになってもいいし，またがった渡ってもいい。要するにまず，渡れればいいんだということです。中村先生がおっしゃった時間の尺度というのは，考えてみるといろんな時間の尺度があって，これを速く渡るというのも一つの価値観だろうと思けれど，確実に時間かけて，そのかわり落っこちないで渡るというのも，大事な価値観だと思うのです。万一落ちちゃったらこういう対応の仕方がある。この子はしょうがない，自分で落っちゃたんですから，ごみ袋で服をつくりました。こういうアダプタビリティというのは自然の中ですごく大事なんですね。

スライド 9. これは，にわとりですが，鎌倉でね，「捨てられたにわとりを捕まえてごらん，捕まえたらコーラおごってあげる」って言うとね，たいてい子供のボスが，「俺が捕まえるからおまえら手出す

な」と，私の賞品を独占しようとするのですね。ところがこのにわとりは捕まりません。そうするとこの子はどうするかというと，「おまえら手伝え」。単独狩猟から共同狩猟になっていくわけです。そのうち，棒を使ったり板がこい持って来たりして，狩猟文化は進んできます。さらに進むと作戦本部ができて，全然追っかけないのですけれど上のほうからですね，「おまえ右行け！」とかね，「ケンちゃんは左に行きなさい」「ほらぁ，こっちこっちぃ」なんて指令を出すのは，これオペレーションズ・リサーチですね。最後に追い詰めて，いち・に・さんって捕まえようと思うと，鎌倉のにわとりは修学旅行の子供たちに追われてますから，百戦錬磨でブワーって飛びあがって飛んでいちゃう。(笑い)おもしろいですよ，実におもしろい。このね，狩猟のプロセスが進化していくというのが，実におもしろいんです。

スライド 10. これは，石を割って，その割った石の鋭いかけらでスイカを切った，あの石器時代の旧石器体験ですね。

スライド 11. これはどんぐりを拾ってそのどんぐりを焼いて食べる。これも，縄文から弥生に移り変わりの頃の体験です。

スライド 12. これは農耕体験ですが，粗放農耕でトウモロコシがいいですね。これ今ジャガイモを掘らせているんです。素手で掘っています，この子は。これはイノシシと同じです。(笑い)ところがこの子は石使っているんです。これ，これすでに旧石器人です。こういう状態になったらさりげなくスコップを置くんです。で，「どぉ，スッコプ，シャベル使ったら便利でしょ」っていうようなことでですね，人類文化史を再演していく。

もう時間ぎれですよね。このくらいで止めておきましょうか。大急ぎでこういうたわいのない遊びもですね，大変巧緻性を要求される。

スライド 13. これ，お面というのは子供，異形の相で喜ぶんですけど，お面顔につけたとき，両手がつかえなっかたらお面はあんまり意味ない。どうやって使うって，よく子供の本なんかに，輪ゴムなんか使いますが，森にありませんよ。この子はですね，これ唇でくわえているんです。これは，一つの創造，発明ですね。

スライド 14. それから，これはオオバコの花の柄でちぎりっこやるんですけど，どのオオバコが一番強いかって，いろいろ試行錯誤やって選択する能力が培われている。それからもっとおもしろい，これ工夫しますとね，はじめに折り目をつけていたほうが強いんです。どうも自然の遊びじゃないとわかりません。

スライド 15. これはヒイラギの葉っぱをまわすのですけれど，むずかしい。強く持つとまわりません。真ん中吹いてもまわりません。ヘリを吹くとまわるんです。まわるとトゲがくいこんで痛いです。指を緩めると落っこっちゃう。落ちなくて，くるくるまわって，いたくないっていうのは大変な巧緻性が要求されるのですね。しかも，この葉っぱが変わったら，全部始めからやりなおさなければいけない。いくらで買ってきたあのプラスチックのモデルが，ラジオコントロールで動くなんて全然違うのですね。これは，自然の持つものすごい教育性だと思います。

スライド 16. もうこの子供たちね，夜寝るとき弓抱えて寝てるんですね。これさっき平野先生，冒頭のお話しのあった八坂村という信州の山の中で，山村留学で都会の子供たちの実際のできごとです。

スライド 17. それと同じように，尾瀬のとなりの館岩村のことなんですけど，子供たちが基地から基地へ移動するのに，先生が運転する車にみんな同乗して「族乗り」もします。都会でこんなことしたら叱られますよね。だから君たちね，おまわりさんがきたら，おまわりさん必ずピィピィって笛吹いて先生を止めて先生叱られる。だけどそのとき先生はね，「この子達はマネキン人形です。非常によくできているけどお人形です。これから運ぶんです」という。そうするとおまわりさんね，よくできてるねぇ，って君たち触るだろうから，触った時にくすぐったがって笑っちゃ駄目だよ，「うん」なんて言って。(笑) それから，これお父さんお母さんに話しちゃ駄目だよ，先生叱られてクビなるかもしれない。「うん!!」。で，後で感想文書くとね，「あのときはおもしろかった」。(笑) 子供の子供たる所以ですね。

みんなして木に登ります。幼児体験というのはすごく大事だなって思います。幼い頃から自然の中でこのような活動やって，そういうときにやっぱり親の子への対応というのはすごく大事。先程ちょっと申し上げましたように，子供は敬愛する大人に模倣

し迎合する ―― これはファーリオンっていうアメリカの児童心理学の先生がいろいろな実験でそういうことを，ちょっとそれ以上詳しく触れられないのが残念ですけど。どうも失礼しました。ありがとうございました。

平野：はい，どうもありがとうございました。では，近藤先生いかがでしょうか。ありませんか。中村先生いかがですか。高橋先生は，はいお願いいたします。

高橋（鷹）：先程ちょっと話しがちらかってしまいましたので。二つだけ，追加したいと思います。

我々が予想，創造している以上に建築物と都市物理的環境，我々の行動に大きな影響を与えるということです。ひとつには最近教室が学級が成立しない，あるいは校内暴力というような問題ありますが，実は貧弱な欠失の建築に生活してるということが，予想以上に私はあるのではないかと思います。これは設計者も文部省もあまりはっきり言わないことですけれども。ある中学校では校内暴力が非常に大変だったところで，あまりにも便所を汚されるので，便所をそのために非常に立派な，きちんとしたものに変えた，とたんにだんだんそれが沈静化していったという話もありますし，子供の非行の問題も，ちゃんとした個室与えられた時にピタッとそれがおさまった，ということもあるかと思います。そういったその，影響というようなものを今までは専門家に任せていたわけですが，その，お使いになる方々と共に考えていく，ということが大切なんじゃないか。そのために小さいときからの，一般の専門家以外の方々の建築に対する素養っていうようなものを高める，そういう教育が小・中・高に必要なのではないか。そういう意味からいきますと，柴田先生のおしゃった，生き物，との同じような意味を物理的な環境である建築は持っていると，いうふうに申し上げたいと思います。

平野：いろいろもっともっと深めたい話題がたくさんありますけれども，ここで指定討論お願いしておりました高橋たまき先生，よろしくお願いします。

高橋（た）：四人の先生方のご専門がそれぞれ違いますので，指定討論はたいへんだろうなぁ，と思っていましたけど，やはり案の定，たいへんのようで。それぞれ核心のついたお話をいただけたと思います。ちょっともとに戻るような感じはございますけれど，私が今日のお話を伺いまして思いましたことは，人間・動物・植物含めまして，地球上の生き物にとっていろいろな面から見て，あの，生きていくのに最も適当な最適レベルというものがあるのではないかと思いました。地球レベルで見ますと，その生息環境の温度・湿度の状態，それから空気中に含まれるいろいろな物質の状態。部屋も，高橋（鷹）先生から建築のお話をいただきましたけども，部屋の明るさ，音の状態，それから構造といったいろいろな状態，あるいは空間の組み合わせ条件によって，環境のいろいろな状況が生まれてくる，というふうに思いました。人間に限りました場合，おそらく未開，中村先生からは未開とか現代という時間のレベルでは小さすぎるということになるかと思いますけれども，人間の，その未開時代の人々に比べますと，おそらく現代の我々のほうがはるかに便利で，安全な生活環境に置かれていると思います。古代人は狩猟に際して，労働力，あるいは農耕作業に関しての労働力を軽減するために道具を作りましたし，それから生産だけではなく生活に適するように自然を改装してきたと思います。また，危険，寒さ，暑さ，あるいは猛獣，といった危険から身を守るために，建築物をつくりその中に住むようになったというようなことがいろいろあったと思います。で，それ以降も，何世代にも亘りまして，人間は自らの住む環境を住みよく，あるいは便利，効率良くするための努力を続けてきている，ということだと思います。けれども，その結果として最適水準を超えたバランスを崩す状況が現在起こっているのではないかということでございます。そのことは本日のゲストの四人の先生がそれぞれ指摘してくださったことだと思います。中村先生のお話で大変示唆に富んでると思いましたのは，あの，物理的な尺度と人間，いや，生物系の尺度をゴチャゴチャにしているのではということです。例えば機械の場合は，ある物理量でレベルを決定することができる。それを人間にまで当てはめてしまいますと，例えば偏差値で生徒を格付けしてしまう，そういう一つの価値だけを用いるようになっている。そういう違うレベルの違う側面のことを混同している，ということが現代の混乱のひとつなのかな，というふうに思いました。

それから，「柴田先生の自然に帰る」「自然に帰った生活をさせる」ということで，自然環境自体も破壊されているのでそこはどうなるのかな，と思いましたけれども，スライドを見せて頂きますと，子供たちが本当に自然の中で生き生きと，人間性を磨いている。自然の状態を身をもって体験している，ということがわかりまして，まだ残されている自然に触れさせるというのが大変重要なのだな，というふうに思いました。教育学者のフレーベルとか，それから哲学者のルソーなども言っていることですけども，現在身をもって体験しておられる柴田先生の体験のお話というのは大変示唆に富んでいたと思います。それから近藤先生の「こころのホメオスターシス」，あのこれを心理学でいいますと認知の問題，認知を変える ―― ひとつの固定した価値観にとらわれずに，認知の構造を変えていくという，要するに「柔軟な心」を持つということなのだと思います。決意をなせども忘れてしまいまして，既成の価値に頼るのが楽なものですから，それでやろうとするわけですけれども，それだけに固執いたしますと，やはりいろいろな問題が起こってくるのだなぁ，ということを教えて頂いたと思います。中村先生から教えていただきましたことは先程申し上げましたので，時間の都合でこれ以上は私が下手な言葉で申し上げる必要はないかと思います。高橋（鷹）先生の建物の問題ですけども，建物は人工物でございますが，その建物の状況によって人間の心，行動は変わる，というのはそういうことは有り得るだろうとは思っていましたけれど，具体的なお話を伺いまして，やはり建築というのは大切なのだ，ということを思いました。お子様建築，ということでございますけれども，たぶん子供に迎合した幼稚園・保育園，あるいは子供部屋っていうのではなくて，もっと危険をある程度はらみながらも，こどもが自由にイマジネーション働かせることができる，そういう空間がぜひ，大人にとってもですけれども，子供にとってもぜひ必要なのだということを，お話くださった，ということを自分なりに解釈しております。私が感想として申し上げたのはそのことでございます。以上でございます。

平野：ありがとうございました。貴重な御感想頂きましたけれども，シンポジストの先生方で，さらに何か補足いただけるようなことございますでしょうか？ただいまの高橋（た）先生のお話も含めましてですが，…特にございませんか，…はい。今日は会場にたくさんおみえになって，いらっしゃって，学生さんもいるようですし相当年齢の高い方もいらしゃるかと思いますが，我々生きている以上，それぞれ，こういった我々を取り巻いている環境の問題にたえず接していることなんで，子供に限りません，人間環境っていうのをいつも関わってとらえていかなきゃならないわけですが。あと 15 分ほどございますので，今，非常に質の高い，豊富なお話うかがいましたんですが，フロアの皆様から何か御発言ありましたら，どうぞ。所属とお名前をおっしゃってから発言をお願いしたいと思います。

フロア 1：会社で 40 年働いたもので感じますのは，心の中にひとつ視点を加えさせていただいたら良いんじゃないかなと思いますのは，いわゆる子供の年代は大人の年代とペアになっているのではないかと。と申しますのは，今働いている大人のおかれている環境，それは子供にまともに反映している，と私はそういうふうに感じを得ざるをえないんです。戦後私 40 年間ずっと勤めている中に，世情環境といいますか，非常に変化してまいりました。最初のころはどっちかといいますとフレキシブルに，いわゆる働く人の発言であるとか，そういうものが企業とか組織とか，中に反映するというかたちがあったのですけれども，だんだん，どちらかというと会議のほうが主流になってしまいまして，もう働く人ほとんどの自由をなくしている，というか，ただそこに働いているだけといったような環境におかれている。それが私はこの感じでは親の権威も劣ってきているんじゃないか。お父さんは今まで自分が主体になって働いているんだ，自己の誇りをもっていたのが，ただお金をもって帰るだけでいい，というような状況が見えている。そういうことがですね，現代の年代で，やっぱり大人の年代もあわせて考えないと，ということを，私は申し上げたい。以上です。

平野：どなたか，シンポジストから，お話頂けますか。

中村：まさに，おしゃるとおりだと思います。実はそれで私，先程申し上げました，初めて書いた子供に関して書いたっていう，この科学技術時代の子供たちの第 1 章は，大人との関係の中で子供をみ

る，といって科学技術時代の大人たちというところから始めております。まさにおしゃる通りだと思います。先程は時間の関係で触れることができませんでした。

平野：他に，どうぞ。

フロア 2：所属は五感教育研究所，高橋と申します。あの，それぞれご専門の立場から中身の濃いお話をありがとうございます。あっという間に時間が過ぎてしまったのですが，たくさん質問がありますが，その中で，何人かの先生の中から「感性」というお言葉がでました。感性という表現されているんですが，それぞれの立場から恐れ入りますが感性とはどういうことか，そして，感性を育む，感性を育てるにはどういうふうにしたらいいのかをご教授いただければ，ありがたいと思います。よろしくお願いします。

平野：では近藤先生からお願いいたします。

近藤：いい質問をどうもありがとうございます。十分話足りなくてちょっと残念でしたけれども，私は感性こそが 21 世紀の一番大事な道具になるとお伝えしたかったわけです。それは，私が今，ライアル・ワトソンという人の考え方を注目しているんですけれども，やはり人間は，例えば「火事場のくそ力」みたいなですね，なんかまだ，私たち 20 世紀の人間がわかっていない，非常に感性を主体にした人間の能力というのが，これから開発されるんだ，そんなふうに感じてます。具体的な子供への関わり方はその感性を伸ばす，あるいは感性が閉ざされている，そのときそれをいい状態に持っていく，そういうことで私は「プレイセラピー」——遊戯療法と共通の思想を持っている芸術療法というのをこれから大事に考えていきたいと思っております。

平野：柴田先生はいかかでしょうか。

柴田：私は心理学者じゃないので，私の全く経験的な面からしかお話できないですけど，感性って私，知的レベルを超えた次元でですね，本能や生理の段階でもう少し高次な心の働きではないかな，と思っております。今，そういう意味ではですね，例えば「惻隠の情」というのがあります。これは，あの，孟子という「四書五経」の中の中国の古典の中の冒頭にでてまいりますね。「人にして惻隠の情なきは人にあらず」って。

最近よく言われるのは「人はタフでなければ生きていけない，だけど，やさしくなければ生きる資格はない」と。その辺のところが感性に関わってくるんではないかって思いますけど。自然の中で生き物相手に子供たちがいろんな活動してますとね，非常にきめ細やかな感性っていうのが育ってくるんじゃないかと，さっきの中村先生のおしゃった物理科学だけの，無機的な環境で育った子はすごく冷たいっていうのか，例えばプツンってきれたときに，ブスッてやちゃったときに，それをやられた人なり動物なりがどういう状態におかれるかっていう惻隠が全然ないんですね。それが私，くちはばったいけど，自然の中で，命に触れることによって豊かに培われるんではないかなと思います。今，私たち若い諸君の間でバイブルのように読まれているのが，レイチャル・カーソンの最期，亡くなる直前にお書きになった「センス・オブ・ワンダー」という本で翻訳もでておりますので，ご高覧いただけたらと思います。

平野：はい，ありがとうございました。それじゃ，後ろの方，どうぞ。

フロア 3：よろしいでしょうか，私はあの，15 年間環境問題をやってきました。子供が 4 人おりまして，子供をずっと育ててきましたので，公園なんかでよく遊んできまして，今日高橋（鷹）先生のお話の中で，公園の遊具で遊ばないというのを目の当たりにしてきました。空き地の資材置き場の木のすのこみたいな積み重ねてあるようなところで遊んだりしてというのは見てきましたので，今日のお話は全くその通りだなぁと思いました。5 年ほど前から，公園に，生物を生かした公園にしてくださいってことを働きかけてきましたが，結局，2 ヘクタールの近隣公園っていうのができまして，その間，その公園には極彩色の児童公園ができてしまいました。

公園造りとか環境問題に長く関わってきて，今日皆様がお話したことが全部関わってきてましたので，こういう都市計画とか環境問題の中に，子供の視点とか生物の視点とか，そういう生きるということの本質的な問題が，行政の施策に必ずしもきっちと入っていってないんじゃないかな，というのを身にしみて感じてきました。こういう問題が現実的な場で生かされていったらいいなぁ，と思いました。本日はありがとうございました。

平野：すいません。御所属とお名前と。

フロア 3 ：あぁ，所属は日本自然保護協会の会員です。名前は小林エツコと申します。

平野：はい，ありがとうございました。

高橋（鷹）：それでは，私の考えではですね，環境をつくるすべてが専門家である，と。確かに，建築家は図面を書いて計算をするという科学技術的なことについては専門家ですけども，環境をつくる全てが専門家であると考えます。ですから，変なブランコを置いた公園ができるのはですね，役所の方が建築に対して，環境に対しての素養が，やや劣っているということがあると思いました。よろしゅうございますか。

平野：ありがとうございました。あと，ひとかた。どうぞ。

フロア 4 ：社会人の尾崎と申します。今日お話を聞きまして，非常にいい話だったなと思いましたけれども，子供の教育において自然と接するっていうのは一番いいとおっしゃられましたけれども，実際問題，私の世代くらいから，もうあまり子供の時代から，自然と関わるということはなくなってきました。それで実際に自然に関わったほうがいい，といわれましても，これからもし自分に子供ができたとしても，わざわざ車で 2 時間かけて自然に触れ合いにいく，というそのような状態でなければ，子供に自然を与えるっていうのは非常に難しい環境じゃないかなと思います。自然以外に，どのようなものでそれを補うことができるのか，ということをひとつ聞かせていただきたいんですけども。

平野：えっと，どなたがよろしいですか，

フロア 4 ：柴田先生に。

柴田：たぶん尾崎さんがイメージなさっている自然というのは，原始時代に限りなく近いような自然だと思うのです。私たちの身の周りもよく気を付けてみますと，自然的片鱗っていうのは結構あります。それから，ドイツのあのチクセン先生っていうのがおっしゃった「日本の自然は半自然だ。人間の営みが非常に穏やかに，ほとんど手作業で，自然に働きかける」と。そのアクションに対し，自然のほうがですね，非常に穏やかなリアクションを起こして，好アクション —— 協調・融和っていうようなかたちで作られているのが日本の自然で，例えば田園景観，そういったものは世界にたぐいまれに美しいものだから大事にしなさいよっておっしゃってお帰りなったんですけど，滅茶苦茶になったんですね。これはひとえに私たちの世代の責任だと思います。未来社会に対して，あの子供たちに対して，私たち深い贖罪の念を持ちながらですね，自然がなくなったら取り戻そうじゃないか，つくりだそうじゃないかっていうのが私の考え方です。今日ちょっと早く来たので，この隣りの駒沢公園を散策したんですけど，非常に立派な自然があった。あれは，オリンピックの記念にこしらえたって書いてあるんですね。ですけど，あの自然が残念ながら結構アンタチャブル・グリーンなのと，もうひとつ残念なのはあの自然に触れようっていう子供がいない。みんなスケボーやったり，自転車で走りまわったりしてですね，物理科学空間で遊ぶばっかりでですね，生物空間である木に登ったり土に触ったりしない。親御さんがですね，そういうのは不潔で野蛮で危険でカッペだっていうような，そういう認識。これは私この現代文明のひとつの陰りであるし，文明論的にいえばちょっと犯罪的なものでないか。私はそういう意味で世代間倫理という考え方で，次の世代に対して私たち取り返しのつかないことやってきたと。

私の生れが 1929 年，といいますと実はニューヨークのウォール街で大パニックが起こった年です。あの頃はまだ日本の自然は非常に豊かでした。私はあのぉまばゆいばかりの自然環境の中で育ってきて，そりゃあもう，私の人生でかけがいのない貴重な経験だっと思うんですけど，あの頃に比べて今，何て情けない自然になっているか。ひとえに私どもの世代の責任だ。深い贖罪の念を抱かざるを得ないんですね。そういう考え方から，失われた自然取り戻そうじゃないか，つくりだそうじゃないかって，そう思っております。そういう視点でごらん頂きますと，世田谷区っていうのはまだまだ非常にいい自然がたくさんあります。それでちょっと手を加えるともっともっと活性化できます。それより大事なことはその自然を子供たちにどう接触させるかっていうようなプログラムだったり展開の手法だろうと思います。

中村：私に言わせますと，もちろん柴田先生のおしゃることはもう 100 %正しいと評価した上で私は申し上げますと，人間にとっての一番の自然はまず人間だと思うんです。だって，おサルさんの仲間

がいたらおサルさんにとって一番大事なのはおサルさんだと，まず，思うんですね。アリの仲間でアリにとって大事なことはアリでしょう。私は一番身近な自然は何かといわれたら，まず人間だと思いますね。人間がいない所ってない。だんだん外のことわかってきた，たとえば 3 つぐらいになったときに，やっぱりお父さんお母さんときっちと付き合う。それから，兄弟，この頃あんまり兄弟いませんけれども，兄弟・お友達・隣りのおじさんおばさん，さっきあのぉおっしゃいましたでしょう。みどりが少ないんだけど，あの犯罪が少ないとこっていうのは，どこかっていったら人間関係がある。私そこがポイントだと思うんです。そこをきっちとしないでね，自然がないから自然がないからって自然のせいにして，人間関係をきっちとしないっていうのはけしからんことだと私思ってるんですね。

柴田：それは確かにそうですね。

中村：それをやったら絶対にその下町は，もう近くにいろんな狭いとこに，何と言いますか，いろんな緑を置いたりして暮らしますよね。それで観察はずいぶんできると私は思います。この間も私大阪の高速道路の何にもないところを，バスでヨーロッパの人たちと走ったんですよ。そしたら，その中の生物学者が「あの鳥なんだ，あの鳥なんだ」って 30 分走っている間にどれだけ鳥を見つけたことか。それは知らないところへ来て珍しいから気にしたらば，鳥はいっぱいいるんですね。大阪の高速道路でですよ。普通そこを自動車で走っている人は，日本人は見ていないと私は思うんですね。

ですから，自然ってそんな柴田先生がおっしゃるようにそういう自然は大事だし，そこへ行くこと，とっても大事だし，しかし毎日の中にたくさんあると私は思っております。

平野：はい，どうもありがとうございました。時間も少々過ぎましたので，司会の立場からいまさら何か申し上げるようなことっていうのは特にございませんけれども，今，中村先生も自然があるっていうようなことをおっしゃてまして，さきほど，ちょっとビックリしましたのは，高橋（鷹）先生が OHP で映し出したマンション，「雪が谷大塚」というタイトルがございまして，私住んでいるのが「雪が谷大塚」。私がそこに住みだしました頃約 60 年以上前には，その周りに野ウサギが走っておりまして，そこの畑とか，林とか，そういったものがたくさんあって，小学校から帰ってまいりますと，近所のガキ大将が中心になって今日は何をして遊ぼうか，今日はあの甘い柿泥棒に行こうとか，今日は魚を捕まえに行こう，そういう上級生のリーダーシップのもとに，6・7 人くらいの学童ですね，泥んこになりながらでかけていく。そのときに小さい子供っていうのはバケツや網を持たせてもらうだけでもすごく嬉しい。そして自分がいっぱしの仲間になったような気持ちでもってでかけていく。そしてそういうものが，伝統とでもいいましょうか，次々上が卒業していくごとに下級生に伝わっていって，私なんかもそういうところで過ごしてまいりました。

今，社会生活をしてきた上ではずいぶん，いろんな意味で，役に立ってるなって感想をもっております。今日のお話伺いまして，自然へ帰っていくとか，あるいは子供と大人と人間との関わり，あるいは自分自身の心と体の調和，こんなものはそういった日常の中の積み重ね，健康な積み重ねのもとで養われてくるんで，そこから，意欲であるとか，創造であるとか，耐性であるとか，あるいは協力関係であるとか，こういった本当に人間に必要なものが養われていくんじゃないか。そういうものを私たちは子供たちにぜひ残していけるような，そういうものを考えていきたい。

皆様も特に今日の集まりの方々はそういうものを強くお感じになっていらっしゃると思いますので，ぜひ，少しでもそういうものを残して，失ったものはそれに近づけていく，こういうことを努めていけたらいいんじゃないか，そんなようなことを思っております。今日は長時間に亘りまして，本当にいろいろご示唆をいただきまして，ありがとうございました。これで，閉会させていただきます。

（拍手）